

ことばの力

現在の地球上に生きている人類の祖先が、音声による会話能力を獲得したのは、今から二十五年以上も昔のことだと考えられています。一方で、文字が発明されたのは、せいぜい約五五〇〇年前のこと、さらに、こうして個人が文字を書き、それを別の多数の個人に読んで貰うということが可能となる環境が整うのは、ここ三〇〇〇〜一〇〇〇年程のことといわれています。

約一三〇〇年前の日本列島でも、多くの人々は文字よりも音声でコミュニケーションをとっていた可能性が高いと考えられます。それだけでなく、声に出されたことばには特別な力が宿る

とも感じていたようです。

磯城島の 日本やまとの国は 言霊ことたまの  
たすくる国ぞ 真幸まゆきくありこそ

(巻十三―三二五四)

磯城島の日本の国はことばの魂が人を助ける国だ、無事であつて欲しい、という歌です。この歌と一緒に長歌には、「葦原あしはらの 瑞穂みづほの国は 神かむいながら 言こと挙げあせぬ国 然しかれども 言こと挙げあげぞわがする 言こと幸さきく 真幸まゆきく坐ませと

：」(三二五三)とも詠まれています。本来は言挙げをしない国なのだけれども、あえて私は言挙げをする、と表明して、ことばどおりに祝福され無事であれ、と詠んでいます。長歌も先に掲げた反歌も、ともに「真幸く」とことばにすることによつて、実際にそうなることを願ったよう

です。ここでは、無事である、と声に出して詠むことが重要であつたようで、そうした歌に詠まれたことばが、現実世界に直接作用すると考えられていたのかもしれない。

現代でも、イメージ・トレーニングによつて潜在能力を引き出すという研究があります。その際、漠然としたイメージではなく、ことばで具体化する

とより有効なのだそうです。

ポジティブなことは

が、自分の精神や肉体を支え、周囲の人にも良い印象を与え、相互に良い影響をもたらす。今は残っていない、かつて声に出してうたわれた膨大な歌の中で、ことばはもつと切実な意味と力を持っていたのだらうと思います。

(万葉文化館主任研究員・井上さやか)



約200年前に流布した「万葉集略解」(18世紀末)